活動報告

地域コミュニティの回復を目指す２つの試み

わいわいコミュニティ・たまがわ／世田谷まちなか塾
林 美栄子

はじめに

平成20年に具体化した２つの地域活動について報告したいと思う。２つはそれぞれアプローチが異なりながら、根底にある問題意識と目指す目標の分野は同じである。未だ始まったばかりの試みであるが、これらを同時に語ることでその地域事情に応じた、未来につながる地域コミュニティは、住民自らが動くことで、人と人とのつながりや絆を再び生み出すことにつながる何かができるのかもしれないと思っていただければ幸いである。

まず、わいわいコミュニティ・たまがわの活動は、赤ちゃんから高齢者まで同じ食卓を囲み、世代を超えて「同じ釜の飯」を食べ続けるという経験をゆるやかに共有する中で、世代間にある壁を低くし、信頼関係を育み、連帯感と仲間の輪を広げていけるかどうかという試みである。なお、ここで大切なことは、それぞれの世代の枠組み＝壁のようなものは、取り除く必要はないということ。それぞれの世代や個人の独自性や個性を保持しながら連帯感を広げていこうとする姿こそ、未来型のコミュニティ創生のプロセスに欠かせない概念だと考えている。

もう一つの世田谷まちなか塾の活動は、一見快適に見える現代社会の狭間で孤独感を強め、浮遊し、将来に希望を見出せずにいる子どもと大人が増えているかもしれない今、中学・高校生自らが各地の「居場所」を見て回り、自分たちにとって必要な「居場所」を提案した。同時並行で、大人は子どもを取り巻く現状について学び、子どもの意見表明に耳を傾け、未来に向かうよき市民社会をつくる不可欠なパートナーとして子どもを捉えるための基礎を築くことを目指した。世代を超えてお互いを理解し合うための、また一つの形を模索する試みである。

１．わいわいコミュニティ・たまがわの試み

わいわいコミュニティ・たまがわ（以下「わいコム」）は、平成19年度の玉川区民講座の企画委員として集まった子育て中の８人が、その活動を通じてお互いを知り、講座が終了した後に、参加者の数名も加わり具体的な活動を始めた任意団体である。それゆえ、「子育て中」と言っても参加メンバーの子どもの年齢は、赤ちゃんから大学生までさまざまで、多様な経験をもつ20代から40代が集まった。この多様性は、子どもの年齢が同じ仲間から得られる連帯感とはまた少し違う。活動２年目の今もこれが私たちの特徴であり強みの一つであると感じている。

1.1 試行錯誤と学びの時間の共有が絆につながる

私たちは平成 19 年の秋から、玉川総合支所の地域振興課主催の「子どもの育つ環境づくり」をテーマにした連続講座の企画を始めた。十数回のミーティングを重ね、4 つの〈環〉〈和〉〈輪〉〈話〉をキーワードに「子育て〈わ〉っしょいプロジェクト」という講座ができた。4 回の連続講座の概要と参加者の感想や気づき等は以下のとおりである（〈環〉〈和〉〈輪〉〈話〉〈わ〉は、丸囲み文字を使用）。

◆「子育て〈わ〉っしょいプロジェクト～子どもの育つ環境づくりのために～」

●第1回－1/30(水)	〈環〉～ 今の子どもをめぐる環境を、子どもの視点から考える
「子どもってなあに？～みんな『子ども』から始まっている」 講師：天野秀昭さん（NPO法人プレーパークせたがや理事）	
○概要：遊びの重要性、自己肯定感を育てること、ダメダメばかり言っているのを変えていこう。 ○参加者の気づき：「自分に都合のいい子どもを作ろうとしていた」「自分の子育ては『いい子』を育てようとしていた」 ○メンバーの感想：子どもに深くかかわってきた経験談には、子どもへのとても大きな愛情が感じられて、強く心に響きました。天野さんの造語、子どもの「AKU（あぶない・きたない・うるさい）」を楽しむ大人になりたいと思いました。	
●第2回－2/6（水）	〈和〉～ お母さんが和やかだと子どもも幸せ
「母として、女性として『幸せスイッチ』ON！」 講師：志村季世恵さん（バースセラピスト）	
○概要：120%がんばってない？－自分を大切にする時間をもちましょう、兄弟姉妹でも違います！－子どもにも春夏秋冬のタイプがある、どの子にも「あなたが一番よ！」と銀座のママさん方式でいきましょう！ ○参加者の気づき：「忘れがちだった余裕を持った態度を思い出した」「心が軽くなった」「コミュニケーションの基本が役立つ」 ○メンバーの感想：晴れた青空を見たら「お洗濯しなくちゃ」ではなく、「気持ちいい」と声に出してみる。自分自身だけでなく、自分と周りの人たちとの関係をよりよいものにするために「想い方」を少し変えてみようと思いました。	
●第3回－2/13（水）	〈輪〉～ 地域には子育てを支援する色々なサークルがあり、人がいる
「強―い味方は地域にあり」 ・第1部「子育て支援のカタチを知ろう！」 パネリスト：山城文子さん（子育てサロン「マザーリング」代表） パネリスト：山田あきさん（子育てサロン「あかたま」代表） パネリスト：世田谷区立奥沢子育て児童ひろば 職員 ・第2部「どうすればいい？みんなで子育て」 近隣同士のグループディスカッション	
○参加者の気づき：「当事者としてできることがある」「子育て仲間でつながると、楽しいより、嬉しいことが多くなるということ」「地域に支援をしようとしている先輩達がいる」 ○メンバーの感想：玉川地域の子育て支援は、しっかり根のはった強い味方であることがよくわかりました。個々の「子育て」のステージは変化し続ける中で、その環境も充実し、刻々と変化しているはずです。このような社会資産や情報を上手く利用し、また伝えていくにはどうしたらいいかということに大いに興味を持ちました。さらに、今の子育て支援のステップアップのために、行政と連携したグループネットワーク作りやリーダーの負担軽減のしくみを考えるなど、私たちにできそうなことが湧き上がってきています。	

●第4回－2/20(水)	〈話〉～ 話し合うことがはじめの一歩！
「はじめよう！子育てわっしょいプロジェクト」 ・第1部：みんなでフリートーク 3回の講座の感想、印象に残ったこと、気になっていることについて、一人一分くらい話し、共有した ・第2部：テーマ別にグループディスカッション ①子どもの環境、②家族関係、③地域の交流	
○グループごとの内容：①子連れで楽しめる場所がもっと欲しい。肩の力を抜いた子育てをしたい、②父親の役割がとても大事。永遠のテーマ、③身近にサークルはあるけれど、誰にでもというふうには開かれていない。地域の誰でも参加できるようなサークルづくりが今後の課題。 ○参加者の気づき：「子どもは自分だけで育てちゃダメ、他人の手をどんどん借りて育てあうべし！」「季世恵さん伝授の『楽観主義』の大切さがわかった」「こんなに子育てに悩んでいる人が多いなんてびっくり！支え合おうよ！」 ○メンバーの感想：この講座を通して、私自身の気持ちは随分楽になりました。日頃の思いを吐き出せたし、子育てについて、自分の身の置き方について、浅くも深くも考えられるようになりました。それから、話すことはいいことなんだなー、人とおしゃべりすることはとても大事だとあらためて思いました。いろいろな考えの人としゃべってパワーをもらった気がします。	

企画段階ですんなりいかなかったことも大小さまざまあったが、根気よく討論を重ねた結果、連続講座は一つの結果を残し、企画から参加した私たちには一種の連帯感が生まれた。当初から全員が、「勉強になった、よかった」だけで終わる講座にはしたくないという気持ちで臨んだ企画だったとはいえ、それまでまったく出会うことのなかった者たちが、同じテーブルで多様な考えをぶつけ合い、時には反発しながらも、より良い着地点を探る経験は、大人になると仕事以外の場面で出会うことは、なかなかない。講座終了後、私たちはそこから得られた、ある種の成功体験の余韻をもって次に進んでいくことができた。

1.2「ゆったりカフェ」の誕生

ほぼ全員が、ここでの学びを具体的なアクションにつなげたいと願い、連続講座のテーマでもある「子どもの育つ環境づくり」にどう参画できるのかを考えた。その結果、子育てそのものを助ける子育て支援のようなことは重要な柱ではあるものの、それで助けられる部分は生活のほんの一部であり、子育てをしている親たちは、もっと人と人がつながる機会を必要とし、そこで育まれる信頼をベースとした温かさの中で子育てをしていくことこそ自分にも子どもにも重要であることを明確にした。そこで生まれてきた発想が、ゆるやかにつながるコミュニティづくりであり、ルールは最小限に、多世代が参加しやすい場で楽しく美味しい「同じ釜の飯」を食べることを続けてみたいということになった。それを「ゆったりカフェ」と呼び、月２回のカフェ開催時は子どもの遊ぶ空間があり、必要に応じて預かりの保育も行うこととした。そして、時には先輩世代から地元の家庭料理やものづくりなどを習えたり、子育てや家庭生活の維持に必要な学習などができればいいと考えた。

1.3 共に食卓を囲むということ

今全国各地で、コミュニティ・カフェ、あるいはコミュニティ・レストランと呼ばれる、地域の人たちが気楽に集う空間づくりが広がっている。赤字が出ない工夫が必要になるが、近隣に暮らすさまざまな立場や年代の人と人が、一緒に同じ空間で食卓を囲むという行為には、人があたり前に生きていくために必要なコミュニケーションや、さまざまな学びの機会が含まれている。料理を作る人は、食卓に集う人たちを想像し美味しい食事を用意する行為が、皆の笑顔を引き出し、自分の喜びややりがいを見出す経験となる。美味しさは人の会話を弾ませ、本来人がもっている優しさや寛容な心を呼び覚ます。また、一定のマナーが必要になるだろうし、子どもが一緒ならしつけも必要になるだろう。現代社会にはたくさんのコミュニケーションツールが用意されているが、地域社会で携帯やパソコンの活用が地域における日常のコミュニケーションを密にしたという話は、まだあまり聞かない。もしあるとするならば、そうしたツールの活用を凌駕するだけの人同士のかかわりや対話があり、信頼関係があると思われる。

地域コミュニティの回復には、信頼関係を醸成する何らかの機会と時間が必要になる。さまざまな人が共に食卓を囲む機会をゆるやかに、かつ継続的に持てたなら、人を信頼する気持ちが孤独や孤立を防ぎ、そこが大切な居場所となっていくのではないかと思っている。さまざまな理由で、家庭の中で家族と食卓を囲む時間が持てない人はなおさらである。

〔ゆったりカフェの開催場所や日時、詳細は、http://blog.goo.ne.jp/waicom〕

2. 世田谷まちなか塾の試み

さて、次は世田谷まちなか塾についてである。私は平成 20 年、世田谷区子ども・青少年問題協議会委員の一人として『世田谷区子ども計画後期計画』の策定に向けた提言のとりまとめのために、世田谷区内の中学・高校生にヒアリングをする機会を得た。それがこのプロジェクトの始まりである。

2.1 子どもたちが自ら居場所について考える機会を

子どもたちを取り巻く物質的環境は、私たちの同時期よりも圧倒的に恵まれていると言っていいはずだが、彼らの話を聞く中で、背景にある家庭状況の複雑さ、失敗を許さない周囲のまなざし、また、仲間たちと思いっきり遊んだり、運動をしたり、音楽活動をしたりという自由が想像以上に制限されていることを知った。それをきっかけに、彼ら自身がもっと各地にある「子どもの居場所」の事例に触れ、話を聞き、考え、自分たちの意見をまとめ、公式に表明できるよう支援すべきではないかと考えた。同時に、子どもたちの不

自由さ、生きにくさに気がついていない大人、子どもが意見表明できることを認めない大人がまだ多数を占めているという私たち大人側の課題も何とかしなくてはならないと痛感した。

そこで同年に、ＮＰＯ法人地域交流センターが全国77ヶ所で実施する文部科学省の「学びあい、支えあい」地域活性化推進事業を引き受けさせていただき、周囲に呼びかけ、子どもと大人が学び合える場として「世田谷まちなか塾」をスタートさせた。そして最初に取り組んだテーマが、「居場所！いばしょを考える～大人も子どもも一緒に学ぶ見たい！聞きたい！話したいプロジェクト～」となった。

世田谷区内に在住・在籍している中学・高校生はどんな居場所がほしいのか。そこをどんな居場所にしたいのか。そして、どんな出会いをしたいのか。中学・高校生自身が実際に各地の子どもの居場所を見て、その運営者やそこで活動する子ども達に出会って、話を聞き、考え、意見表明するための機会を創っていくことを第一の目的とした。また、そのイメージを将来に向けて世田谷区内で具体化していくためにも、大人が、現代社会における子どもの現状をまずはまるごと把握し、どのように子どもたちの成長を支援していくべきか、その立ち位置について考える機会を持ちたいと考えた。また同時に、子どもの姿や地域社会の様相を通じて、大人を取り巻く環境を見据えながら、地域の大人や親には何ができるのか、何が求められているのかについて、思いをめぐらす機会にしたいと考えた。

企画の全容は以下のとおりである。

◆「居場所！いばしょを考える ～大人も子どもも一緒に学ぶ見たい！聞きたい！話したいプロジェクト～」

《事業概要》

●２月２１日（土）午後３時（15 時）～午後４時半

訪問先：ゆう杉並・児童青少年センター（杉並区荻窪１ 丁目 56-3）定員 15 名

＊小学５ 年生～高校３ 年生(18 歳)対象

T&Iリーダーチームのメンバーが中心に進めますが、参加者同士で世田谷区に「ゆう杉並」のような施設や中高校生のあり方について提案していけたらと思っています！！
それと並行してほかの区や、他校の中高生とのなかまづくりが出来たらいいですね♪
（他に、高校生有志が「調布市青少年ステーション CAPS」も自主的に訪問）

◆ ◆ ◆ ◆

●２月２７日（金）午前１０時～１２時　定員 40 名　参加費無料

会　場：玉川区民会館第５集会室（大井町線・等々力駅から徒歩２分）

テーマ：「子どもの居場所づくり～問われる子ども観」

講　師：天野秀昭さん（NPO 法人プレーパークせたがや理事）

＊子ども・親子・家族の支援者、保護者向けセミナー

全国に広がるプレーパーク作りの原点である、冒険遊び場「羽根木プレーパーク」。ここの初代有給プレーリーダー時代からずっと子どもの育ち、居場所づくりにかかわってこられた天野秀昭さんに、「子どもをどうとらえ、支援していけばいいか」「子どもにとって『居場所』とは何か」について、話していただきます。また、「せたがやチャイルドライン」の活動、世田谷ボランティア協会・元職員としての経験も交えたお話もしていただきます。

●３月６日（金）午前１０時～１１時半　定員80名　参加費無料

会　場：世田谷文化生活情報センター（キャロットタワー5Ｆセミナールーム AB）

テーマ：「子どもの成長で変化する親の支援と居場所」

講　師：尾木直樹さん（教育評論家・法政大学教授）

＊子ども・親子・家族の支援者、保護者向けセミナー

めまぐるしく変化する現代社会の環境の中で、子どもの成長にとって必要なことは何か。また、見過ごされがちな、親、親子、そして家族に対する支援が重要性を増しているのはなぜか。長年子どもの育ちや思春期の危機に関する調査・研究活動に取り組まれてきた尾木直樹さんに、現代社会の様相から見えてくる子どもや家族に関するお話をいただき、私たちが地域でできる課題解決の糸口をさぐります。

◆ ◆ ◆ ◆

＊最後は大人＆子どもが一緒に視察会＊

●３月１５日(日) 午前９時出発・午後４時(16 時)頃帰着予定

訪問先：佐倉ヤングプラザ（千葉県佐倉市栄町 8-7・京成佐倉駅近く）

千葉市子ども交流館（Qiball・きぼーる/千葉市中央区中央 4-5-1・ＪＲ千葉駅近く）

以上の事業を実施することによって、子どもたちの「居場所」訪問リポートと提案書、ゆう杉並と杉並区児童館の運営を支える思想やしくみ、ならびに、天野秀昭氏、尾木直樹氏によるセミナーの抄録、大人の居場所の考察や「子どもぶんか村」の事例報告を、一冊の報告書『居場所！いばしょを考える ～大人も子どもも一緒に学ぶ見たい！聞きたい！話したいプロジェクト～』(平成 21 年 3 月、世田谷まちなか塾実行委員会)にまとめた。詳しくはそれをご一読いただきたいが、そこから、子どもたちがまとめた提案部分を抜粋する。

〔報告書は、http://www.childrensvillage.jp/machinaka_08.pdf〕

６．提案書（報告書 P19-21）

報告者全員で、5つの施設の現状を見学した結果、たくさんの意見が出た。第一に児童館の形態を崩したくないということ。気軽に立ち寄れていいと感じるのは、裸足または靴下、スリッパなどで歩く施設だということ。ゆう杉並のような天井が吹き抜けているような場所は理想だけれど、池尻児童館のように少し狭い場所だからこそたくさんの人と交流できるものだと思う。

施設によって職員のかたさが気になる。「もっと気軽に」それを自分たちは一番大切なことだと思っている。施設があって、それを使うのは構わないけれど、ただ人を集めるような「建物」ではなく一緒に作り

上げていける「建物」であってほしい。そしてそれが中高生の関わり続けることのできる施設であってほしい。
　また、スタジオを設置するならば、やはり専門の人が欲しい。機材の使用方法や楽器演奏の講習などがあったら良いな。と思う。
など、他にもたくさんの意見がでた。それを具体化し次のようになった。ただし、今回の見学等で見て感じたことから作ったものである。だから、多少の工夫は必要かもしれないが、本業の学業と並行して作り上げたものであることを理解していただきたい。

「どんな世代利用でもでき、中高生が優先して使える施設」の提案

目標

・幼児から高齢者まで利用可能。ただし、中高生がさまざまなことができる施設にする。
・世代を超えたつながり
・運営の一部を、中高生または今まで児童館等でかかわってきた人（ボランティア・青年・ジュニアリーダー）などがやれるようにする。

施設をつくるにあたって

・建設時から中高生がかかわる。つまり、行政が作るだけではいいものはできない！
・今回僕たちは、新しい施設から古い施設まで見学をしひとつきづいたことがある。それは、建物の築年数でなく子どもたちによって構築されていくことのほうが大事。古い施設を使用するのもありだと思う。（改修はする。）
・最近、子育て支援館などが建設されている。しかし、これは幼児期での利用のみ。そうやって、行政が勝手に成長過程を区切っている！0歳～独り立ちするまで（18～20歳代）がずっと同じ場所で育っていく環境が大事であるため、区切るようなことはしないでほしい。
・行政の管理では限界があり（ただし、行政の中にいる中高生の力になってくれる職員はいる）民間委託をするのも手だと考える。
→行政と民間がいっしょにやる新しいカタチもありではないか。
・民間委託（民間委託によって専門職員が外部の本職または副業に就くことができる。
→公務員では、副業ができないため）するなら、専門職員の雇用を考えてほしい。また、職員の人事異動に関しては中高生や地域の意見をとりいれるべきである。感情的なことではなく、信頼関係を築くことは時間のかかることで短期間で構築されるものではないからである。
・職員の任意でおおがかりな行事の際に宿泊などが許されるような概念がほしい。

必要な設備

・幼児の部屋（児童館の体育室くらい柔軟に使える広さが欲しい）
また、千葉市子ども交流館のプレイルームのようなものが欲しい。
・小学生以上用の体育館（ゆう杉並・千葉市子ども交流館のように収納式座席を導入しイベントの際に使用可）
・中高校生以上のスタジオをなるべく多く設置。（中高生の使用しない平日の午前中は、大人向けの講座をもうけるなどの策を考える。）
・グラウンドがあるといい。（外で遊びたい！！）
・無料の講座（ex：音楽、楽器レッスン・学習塾ほか）
・工作室
・調理する所（IHはダメ。火というものがきっちり見えるほうがいい）
・学習スペース
・飲食スペース
☆このほかにもたくさんの案があがるので慎重に検討するとともに中高生中心に考えていってはどうかと提案する。

世田谷区の現状を聞いて提案したいこと

若林中学校、山崎中学校の合併。希望丘中学校、船橋中学校の合併。いずれにしてもどちらかの建物は使用されなくなるのであれば、改修工事をして僕たちが提案するような施設を作ってはどうかと思っている。もちろん、すでに再利用の計画があがっていたとしてもだ。校庭や体育館があったり、敷地面積もあれほど確保している場所などめったにない。

そんな提案書を作っているさなか、目黒区の中高生が自ら作成した広報誌をたまたま手にして見て唖然とした。目黒第六中学校の跡地に、児童館などが入る複合施設が計画されていることを知った。正直、どんどん世田谷区が遅れているように感じてならない。

ただでさえ、合併によってショックをうけている友達もいる。そんな思いが詰まる校舎だからこそ、そのような利用をしていくことはおおいに検討してほしい。また、冒頭の世田谷区立池尻児童館で触れた池尻小の体育館などの施設の併用ももちろんのことである。

（抜粋了）

このような提案を、「たかが子どもの意見」と思うか、「一人の子どもの意見として認めていこう」と思うかで展開が変わる（報告書 P29、杉並区保健福祉部青少年課事業係長・片山隆司氏）。

子どものそれぞれの個性を認め、対等な立場で信頼関係を積み重ねていこうとする大人の態度や存在が、子どもの育ちを保障し目を輝かせ、よりよい未来への可能性を広げるということでは、杉並区の片山氏のアドバイスは、天野氏、尾木氏の主題とも共通している。時代は確かに変化しているが、今回のプロジェクトを通じて、子どもの思い、子どもの成長に必要な物事はあまり変わってはいないこと、変わったのは社会や大人のまなざしであるということがはっきり認識できたように思う。ここからがスタートである。

2.2 大人も自らを振り返る機会を

今、公園が「騒音」や「危険」防止のための注意書きだらけになりつつあるらしい。公園や学校など、子どもの歓声が響く音が「騒音」なのだと言う地域住民が増えている。異年齢の子どもが混ざって遊ぶことを危ないと考える親も増えている。青少年がたむろしそうな場所には、概ね 10 代にしか聞こえない高周波音の発生装置さえ取り付けてあるところもある。また、西東京市では公園の噴水で遊ぶ子どもの声がうるさいという苦情によって、最終的には公園の噴水が止められてしまったという象徴的な話もある。そして誰も寄り付かない公園を警備員が見回っている、などという相当奇妙なことが現実にあちらこちらで起きているらしい。

昨年青少年烏山地区委員会主催で、烏山地域の３つの中学が参加する「中学生のつどい」を聴いた。ある中学生男子の主張でも、子どもたちの居場所の無さが指摘されていた。「(公園や屋外にいても)なぜ子どもたちが友達とゲームばかりするようになったのか。現実に遊ぶ場所がない。遊んでいるとうるさい、小さい子がいるから危ないと言われる。親も子どもの遊びを制限していないか。子どもをもっと見守ってほしい。小学生の弟を見ていると、僕らが小学生の頃よりももっと遊べなくなっている。心配だ。」

子どもの歓声を「騒音」と感じたり、青少年の存在を危険と感じるかどうかは、どうもコミュニケーションと相互理解がうまくいっているかどうかと関係しているらしい。不寛容な大人、地域住民はおそらく増えている。だが、そもそもなぜ多くの人が不寛容で不機嫌になってしまったのか。もともとはそんなことはなかったはずである。一つは長時間自宅で過ごす高齢者が増えていることがあるだろう。しかし一番の原因は、私たちが、その時代に合った世代間ギャップを埋める、すなわち壁を低くしておくための努力を怠ってきたということのようだ。つまり、大人のコミュニケーション不足のツケを今、子どもに支払わせているようなものかもしれない。

子どものケータイ依存やいじめの構造もこのような現状と密接に関わっているはずだ。

3．地域コミュニティの回復を目指す試み

わいコムの「ゆったりカフェ」の活動も、世田谷まちなか塾のプロジェクトも、さまざまな世代が同じテーブルで語り合い、学び合い、時間や思いを共有し共感でつながる試みである。こうした試みを継続していくことで、やがて連帯感が生まれ、必ずよき循環が生まれていくものというイメージを持っている。ただ、それはさまざまな人間関係から発生するある種の化学反応であり、どんなものになるかは急ぎすぎず楽しみに待つしかない。人が人との関係の中で生き、成長し、時には苦労を共にし、怒ったり悲しんだりしながらも、やがて喜びを分かち合う仲間に出会えれば幸いであるが、その場面設定は自分たちの手で作り出すしかないし、それでこそなのだろうと思う。ただ、人と関わる中で必ず発生する面倒なことや困難を乗り越える勇気は、なかなか皆が同じように持ち合わせているわけではない。人を信じきるという体力も必要となる。

そんな時、ある地域活動を誰がどんなストーリーで始めたのかについて、多くの人が関心を寄せる。社会にはお金に換算できない大事な仕事があることは誰しもが理解している。しかし実際にボランティアで、小さくとも公益的な営みを継続していく時の旗振り役になることには、誰しも尻込みしてしまう。当事者が抱くいてもたってもいられない問題意識か、あるいはそれぞれの人にとっての楽しみや魅力が相応に見出されない限り困難が伴うことも容易に想像できる。そこで必要になってくるのが、活動の根幹に関わるどこか一点でいいから共感し合える仲間と共に、小さな成功体験を一つずつ積み重ねる経験なのだろうと思う。

私見ではあるが、行政が今、もう一つの公共セクターを育てておかないと、あと 10 年後、もしかしたらもっと早い時期に、行政が用意する公共サービスだけでは立ち行かなくなると思っている。必要となる公共サービスや支援は、需要が増すうえに、さらにきめ細かいものが要求される時代になるだろう。その時に地域の多様な活動を担う区民の力が育っていれば、行政と区民が協力し合い、生きがいのある、豊かな地域社会を形成できると思っている。

今以上に、行政は地域住民の力を信じ切り、地域活動に必要な支援は何かを考え、後方支援をしていただきたい。一つは学び合う場づくりであろうし、最初の成功体験を掴み取るまでの何らかのしかけだろうと思う。そしていつか、助け合い精神を基本としながらも、行政が保障していくべき、セーフティネットを含む福祉に関わる事業の推進にあたっては、地域住民と相互に補完し合う関係が築けるようになればいいと願っている。

先にあげた私たちの２つの試みは、今はまだ本当にささやかなものだが、一度は希薄になってしまった地域のつながりを回復させるための、きっかけになる可能性は秘めている。今、仲間と共に一所懸命に育てているところであるが、仲間や協力者がいなければあっという間に消えてしまう活動である。そこをどう乗り越え、育てていくのかというストーリーは当事者にも未知なことがたくさんある。そういう者たちが紡ぎ出すストーリーが、これから地域活動をはじめようとする人たちに、何らかのきっかけや勇気を与えることになれれば幸いである。

今後、何らかのテーマで集まった人たちが他者とつながり、助け合いながらより良き変化の波を起こし、そこに身をゆだね試行錯誤するその場が、それぞれの人にとって居心地のいい居場所となれば、それが地域の有機的なコミュニティとして動き出していくと確信している。

（了）